

# 近世後期における地域指導者層の学問受容—宮負定雄を中心に—

小田 真裕

## KNOWLEDGE-RECEPTION BY REGIONAL LEADERS IN JAPAN DURING LATE EDO PERIOD: FOCUSING ON MIYAOI, Sadao

ODA, Masahiro

※学位取得後5年以内に出版予定である。

※本データは、学位論文のうち、序章・終章と内容構成を示したものである。なお、註の番号は、学位論文のものから本データ上の番号に改めた。

※凡例

- ・ 史料の引用中における括弧や傍線は、筆者が補ったものである。
- ・ 特記しない限り、〈 〉は半角文字、[ ]は後で書かれた内容を示す。
- ・ 史料の表記は固有名詞を除いて原則的に旧字を新字に改め、適宜句読点を付した。翻刻が刊行されている史料についても同様である。なお、ムは「ゴザル」、合字の「より」は「より」に改めた。

※初出一覧

序章 …新稿

第一章 …新稿

第二章 …「平田篤胤門人宮負定雄の教諭論」（『関東近世史研究』六一、二〇〇七年）、  
「東総地域における神職の学問受容」（『千葉史学』五三、二〇〇八年）などに記した内容を大幅に改稿。

第三章 …「宮負定雄『民家要術』諸本の関係」（『書物・出版と社会変容』五、二〇〇八年）を大幅に改稿。

第四章 …新稿

第五章 …「嘉永・安政年間の宮負定雄」（『國學院大學研究開発推進機構紀要』三、二〇一一年）を改稿。

第六章 …「東総地域における神職の学問受容」（『千葉史学』五三、二〇〇八年）を改稿。

第七章 …新稿

第八章 …「下総万力村金杉貞俊の天保飢饉認識」（菅原憲二編『記録史料に関する総合的研究VI 記録史料と日本近世社会』千葉大学人文社会科学研究所、二〇一〇年）を大幅に改稿。

終章 …新稿

この他、本論文の内容と関わる論考として、下記のものがある。

- ・ 「国学とフォークロア—宮負定雄における民俗—」（『国文学 解釈と鑑賞』七三一八、二〇〇八年）
- ・ 「佐原から考える平田国学」（『地方史研究』六〇—四、二〇一〇年）
- ・ 「幕末筑前における平田国学」（『七隈史学』一四、二〇一二年）

## 序章

## 一 「地域」への着目

本論文は、近世日本の地域指導者層にとって学問が持った意味を、宮負定雄（寛政九（一七九七）～安政五（一八五八））に焦点を当てて検討するものである。

宮負定雄は、下総国香取郡松沢村（現千葉県旭市〈旧干潟町〉）で名主を務めた、平田篤胤生前の気吹舎門人である\*1。先行研究では、「草莽の国学者」の一人として、あるいは近世後期の村役人や豪農の位置付けを考えられる対象として、多くの論者に注目されてきた。こうした研究の蓄積を踏まえ、本論文では、宮負定雄の生涯に渡る思想形成・変容の過程を、彼を取り巻く人々との影響関係に着目して検討する。

近世日本の豪農商層や村役人層による学問受容を扱った研究には、取り上げた人物たちの影響関係や相互認識を明らかにしたものは少ない。本論文では、宮負定雄の他、第二部で宇井包教・金杉貞俊を取り上げ、彼らの思想を明らかにするとともに、彼らの居村である松沢村と万力村（現千葉県旭市〈旧干潟町〉）、さらには両村周辺の地域社会における学問をめぐる状況を解明したい。

このように、本論文が「地域指導者層の学問受容」というテーマからの地域史研究を志向する背景には、「地域」をめぐる現状に対する筆者の課題意識がある。その一つは、市町村合併や、都市化・開発に伴う地名変更などで、従来とは異なる行政単位や新たな市町村・字名のもとでの生活が求められる状況である。現在、千葉県旭市に含まれる近世の松沢村域および万力村域は、二〇〇五年七月までは干潟町の一部であった。旧干潟町域には、大原幽学が活動の拠点とした長部村や豪農平山家の居村鑄木村も含まれている。旧干潟町域の近世村は、領主支配が錯綜しており、自然環境の面でも、北部の下総台地上にある松沢村、椿海の干拓によって成立した万力村といった違いがある。

「平成の大合併」によって成立した現在の旭市は、近世の海上・香取・匝瑳という、先行研究で「東総」\*2の一部として扱われてきた三つの郡にまたがる領域から構成されている。この「東総」という呼称は、一九七一年に指定された広域市町村圏に用いられており、東総地区広域市町村圏には、「平成の大合併」前の自治体では、本論文で中心的に取り上げる干潟町と銚子市・旭市・八日市場市・飯岡町・海上町・光町・野栄町が含まれている\*3。

現在の旭市は、東総地区広域市町村圏に含まれていた旭市・飯岡町・海上町・干潟町の一市三町が合併して成立した。合併を必要とした理由としては、日常生活圏としての一体化や広域行政への取り組みに加え、「地理的にも歴史的にも経済・文化・生活の面で深い結びつきを有してきた」ことがあがっている\*4。

しかし、近世に生きた人々にとって、現在の自治体の範囲や、「東総」のような地域概念は自明のものではない。現在の旭市域の行政区画変遷を示した【表序一1】からは、新たに定められた行政単位での生活が営まれ、また新たな町や村の枠組みが置かれ、その行政単位での生活が営まれ…という繰り返しを経て、現在の旭市が形成されたことがわかる。過去にその地で生きた人々が「地域」に対してどのような意識を抱き、どのような営みを行ってきたのか。こうした点を、彼・彼女たちに即して明らかにする作業の積み重ねは、いま行う地域史研究として重要な意味を持つはずである。

このように、意識面に着目して地域の歴史を明らかにするという手法は、東日本大震災を経た現在、重要性を増していると筆者は考えている。二〇一一年三月一日に発生した地震・津波は、多くの人命を奪い、土地や建造物に多大な被害を与えた。また、放射能汚染のために立ち入りが禁止された地域には、植物の繁茂や家畜の野生化も見られるという<sup>\*5</sup>。

本論文のフィールドである千葉県旭市は、津波や液状化現象などで多大な被害を受けた災害救助法適用市町村である。海に面していない旧干潟町域では、津波による死者は出ていないが、筆者は、お世話になっている旭市域の史料所蔵者・機関の方々から、家の間近まで津波が迫った、知人宅が浸水したといった生々しいお話を伺った。東日本大震災による地域社会の変貌は、過去にその地で営まれてきた人々の営為を掘り起こし、記録し、伝えていくことの大切さを自覚させる。その際、そこで着目する「人々の営為」として、名を残した人物の活動や、成功した結果ばかりを取り上げるべきではないだろう。それは、過去の人々が地域社会の危機や課題にどう向き合ってきたのかという点を、思索や葛藤の過程も含んで明らかにしてこそ、今後生じる課題への対応策が考えられるはずだからである。

【表序—1】現在の旭市域の行政区画変遷

郡名	天保郷帳(1834年)の村名と石高	地方行政区画便覧(1886年)	市町村制施行による町村名(1889年)	町村合併促進法公布時の町村名(1953年)	1996年	2012年～
香取郡	船戸村ほか (桜井村) (381余)	桜井村	神代村	神代村	東庄町	東庄町
	松沢村 251.1837	清和村	庄内村	中和村	干潟町	
	諸徳寺村 355.588	入野村				
	入野村 1279.015	南堀ノ内村				
	南堀内村 147.269	米込村				
	米込村 963.891	長部村	古城村	古城村		
	長部村 248.33	万力村				
	万力村 2460.182	万力村	古城村	古城村		
	鍋木村 1099.56632	鍋木村				
	秋田村 1157.767	秋田村	万歳村	万歳村		
	長部村 248.33	長部村				
	溝原村 396.6603	溝原村				
	関戸村 490.109	関戸村				
	万歳村 2838.451	万歳村	豊畑村	豊畑村		
大塚原村 460.8658	大塚原村					
駒込村 186.7846	駒込村					
泉川村 486.11	泉川村					
井土野村 1385.8245	井土野村					
川口村 680.703	川口村					
鎌数村 2033.70245	鎌数村					
新町村 266.812	新町村					
太田村 1293.279	太田村	共和村	共和村			
海上郡	十日市場村 430.5337	十日市場村	旭町	旭町	旭市	
	成田村 234	成田村	旭町	旭町		
	網戸村 321.082	網戸村				
	東足洗村 243.411	東足洗村				
	西足洗村 232.22	西足洗村				
	野中村 226.04	野中村	浦賀村	矢指村		
	椎名内村 318.7516	椎名内村				
	足川村 477.9075	足川村	足川村	富浦村		
	中谷里村 546.9317	中谷里村				
	仁玉村 169.074	仁玉村				
	神宮寺村 402.7083	神宮寺村				
	(琴田村) 1893.981	(琴田村)	豊鳴村	豊鳴村		
	(江ヶ崎村) 215.703	(江ヶ崎村)				
	高生村 701.123	高生村	滝郷村	滝郷村		
	後草村 197.668	後草村				
	清滝村 2027.758	清滝村				
	岩井村 223.131	岩井村				
	松ヶ谷村 149.291	松ヶ谷村	鶴巻村	鶴巻村		
	幾世村 1410.152	幾世村				
	蛇園村 383.705	蛇園村				
	長尾村 44.455	長尾村				
	倉橋村 212.14184	倉橋村	飯岡町	飯岡町		
	見広村 194.58855	見広村				
	大間手村 610.988	大間手村				
	飯岡村 268.1	飯岡村				
	下長井村 195.94	下永井村	飯岡町	飯岡町		
	上長井村 274.3615	上永井村				
	行内村 85.605	行内村				
	平松村 161.259	平松村				
	横根村 264.461	横根村				
	萩園村 140.324	萩園村				
	岩崎村 27	岩崎村				
	三川村 1264.967	三川村				
	権田沼新田 56.976	権田沼新田				
塙村 486.6187	塙村					
小浜村ほか		豊岡村	銚子市			

『日本歴史地名大系第12巻 千葉県地名』(平凡社、1996年)、『角川日本地名大辞典12 千葉県』(角川書店、1984年)より作成。  
 桜井村は『旧高旧領取調帳 関東編』(近藤出版社、1969年)の記載を採用した。

さて、右のような現代的課題を視野に入れた本論文だが、題目にある「地域指導者層」や「学問受容」に関しては、日本近世史において豊富な研究蓄積がある。以下、この二点に関する先行研究整理を行い、本論文が取り組むべき課題を明確化する。そして、その課題に取り組む際の分析視角を導き出す。

## 二 「地域指導者層」の捉え方

まず、本論文が「地域指導者層」に着目する理由を、日本近世史における中間層論の研究史から説明する<sup>\*6</sup>。

近世日本の中間層について考える上では、佐々木潤之介の「世直し状況」論および豪農・半プロ論における、幕末維新期の豪農に対する評価と、一九八〇年代以降に活発になされた佐々木の議論に対する批判を押さえる必要がある。佐々木は、中間層を「ブルジョア的ナショナリズムそのもの、あるいはそれに基づく運動の主体」と定義した。そして、幕末維新期の豪農について、中間層が本来果たすべき変革主体としての役割を果たさなかったと評価した。

こうした佐々木の議論に対し、豪農を村役人一般と等式に置いている点、豪農と半プロの対立関係を過度に強調している点などを批判する見解が示され、「政治的中间層」（久留島浩）、「身分的中间層」（朝尾直弘）といった概念が提起された。平川新による十八世紀半ば以降の「静かな変革」状況への着目と、変革主体としての村役人層の位置付けに表れているように、中間層による公共性の体現や行政能力の獲得を評価する見解が示されるようになったのである<sup>\*7</sup>。平川は、地域おこしのような行動も視野に入れて「地域リーダー」を考えることで、従来の中間層論では取り上げられてこなかった対象を分析の俎上に載せた。地域社会の成り立ちに腐心する地域リーダーたちが各地で検出されたことは、地域史研究の進展という観点において重要な意味を持っている。

しかし、中間層の力量を高く評価する研究動向に対しては、地域の社会構造や経済的側面の分析が不十分である、主体への関心が弱く、「権力」性の源泉や内容が解明されていないといった批判が寄せられてきた<sup>\*8</sup>。また、近世後期から幕末維新期における中間層同士の矛盾・対立の具体例を示した研究も増えている<sup>\*9</sup>。先述したように本論文は、地域社会全体の学問・思想をめぐる状況の解明を志向している。地域社会の成り立ちを支えた諸主体を広く視野に入れるという平川の方角性を受け継ぎつつ、行動自体の紹介に重きが置かれ、そうした行動に至った課題意識の検討が不十分な従来の中間層研究の課題を踏まえ、本論文では、中間層同士の関係意識に留意した検討を行う。

また、本節で取り上げてきた諸研究では、村役人層以外の人々が地域社会の成り立ちに果たした役割が十分に検討されてこなかった。宮負定雄は、先行研究において「国学的村役人」（深谷克己）、「在村型豪農Ⅰ」（渡辺尚志）などと位置付けられており、「地域リーダー」概念にも当てはまる人物である。しかし、第一部で明らかにするように、彼は松沢村の村政改革を、村役人以外の上層百姓や神職宇井包教とともに行おうとした。また、久留島浩は、宮負定雄の主著『民家要術』を用い、村役人たちによるあるべき村役人の資質の設定という、十八世紀後半以降の時代的特徴を指摘しているが<sup>\*10</sup>、村役人層以外の人々が求めた村

役人像についても考える必要があるだろう。

第二部で取り上げる下総国香取郡万力村の百姓金杉貞俊は、名主を務めた人物ではないが、著述のなかで村役人のあるべき姿について論じている。彼は、地域の人々から口承によって様々な知識を得てきたことに言及しており、村役人論も、そうした地域社会に生きる人々との影響関係のなかで形成されている。貞俊の思想形成過程を解明し、地域社会における話題や人々の志向性を明らかにすることは、中間層論の課題に応える作業となるだろう。

宮負定雄が学問を通じて地域社会とどう関わり、地域の人々は彼の学問受容をどう捉えたのか。こうした課題を考えるには、地域社会の成り立ちを担った、あるいは担うべきとされた存在を、当時の地域社会に生きた人々の視座から考えていくべきである。本論文では、身分や階層と対応する範疇や、特定の研究動向を想起させる概念を前提とするのではなく、「地域指導者」という漠然とした概念を用い、この課題を考えていく。

### 三 「学問受容」の捉え方

次に、「学問受容」への着目の仕方について説明する。

宮負定雄を「草莽の国学」の一例として取り上げた伊東多三郎の著書が一九四五年に刊行されているように、中間層の学問受容に関する研究蓄積は厚い<sup>\*11</sup>。国学思想史研究では、松本三之介が、宮負定雄らによる「幕末国学」を国学思想の「応用篇・実践篇」として理解した<sup>\*12</sup>。また、芳賀登は、国学運動を天明・天保・幕末の三期に分け、宮負定雄を、農事改良や農村更正を課題とする「天保期国学者」と位置付けた<sup>\*13</sup>。岸野俊彦は、入門者の時期による地域差を平田門の主要な思想的潮流の変化と結び付け、ペリー来航以後の平田門における海防や攘夷などへの関心の高まりと、晩年の宮負定雄に見られるような神霊界への関心との方向性の違いを指摘した<sup>\*14</sup>。

また、国学以外の学問に目を向けると、儒学については、宮城公子によって寛政期頃に「儒学の大衆化」傾向が見られること、川村肇によって儒学を受容した在村知識人が、儒学の枠に捉われない「知的拡大」の傾向を見せたことが指摘されている<sup>\*15</sup>。蘭学・洋学については、田崎哲郎が、門人帳の分析などによって、在村における蘭学学習者の広範な展開を明らかにしている<sup>\*16</sup>。

しかし、国学・儒学・蘭学といった学問の地域社会での展開に関する先行研究は、人々が受容した学問の中身について、頂点的思想家あるいは「国学者」「儒者」「蘭学者」等の著述を読んだ事実や、そうした人々の著述との論理の近さを指摘するに止まるものが多かった。そのため、国学思想が「応用」「実践」される過程や、文人・知識人たちが「知的拡大」をしていく過程は具体的には明らかにされず、それらの学問のどこが彼・彼女たちを惹きつけたのか、彼・彼女たちがなぜその学問を学んだのか、といった点も不明であった。

この、国学や儒学といった学問の中身への踏み込みという課題を克服する上で有効な方法を示しているのが、書物を史料として用いた研究動向である。対象とする人物が読んだ書物と読み方の特徴、あるいは蔵書の構成を踏まえた思想分析が行われることで、近世の

人々が受容した学問の中身が明らかにされてきたのである。そして、個別事例の蓄積だけでなく、書物に着目し、近世社会における知識のあり様の全体像を描く試みもなされている。

横田冬彦は、元禄・享保期の民衆が〈知的読書〉というべき質の読書を行っていたと指摘し、新たな〈公論〉形成の可能性が導き出される幕末維新期までの展望を示している<sup>\*17</sup>。また、書物知が受容される局面だけでなく、活用される局面を重視し、民俗的な知・呪術的な知の存在と文字知の関係を問い、近世社会の全体的な知の構図を見通している<sup>\*18</sup>。

若尾政希は、個々の書物の内容に踏み込んで「書物の思想性」を追究することの重要性を指摘した<sup>\*19</sup>。そして、「主体形成を問う思想史」を提唱し、近世の思想を三層構成で理解する三宅正彦の「思想の成層」論、安丸良夫の「近世的コスモロジー」論を踏まえ、専門的知識層・中間的文化層・民俗的文化層に対応するコスモロジーの形成過程を展望している<sup>\*20</sup>。

こうした書物や出版に着目した研究の深化と相俟って、近年の平田国学研究では、新出の平田家や地方門人に関する史料を用いて、篤胤の著書や気吹舎の出版物について多くの新事実が明らかにされている。そこでは、「国学」や「平田国学」の受容という漠然とした理解ではなく、気吹舎門人たちが受容した知識・情報の具体的内容が明らかにされ、平田国学という学問や気吹舎という組織・集団のイメージが塗り替えられている。書物を通じた国学思想の伝播だけでなく、「往来するモノと情報のすべてが当時の気吹舎の具体的な活動を表象している」と捉える遠藤潤、平田国学受容層を篤胤の思想を主体的に選び取った「受容主体」として位置付け、篤胤と平田国学受容層の相互の知的影響関係に着目する吉田麻子、自筆稿本と清書本、篤胤の講釈と没後に読まれるようになる講釈本を区別する必要性を指摘した中川和明らの研究は、書物や出版に着目した研究動向に対する重要な問題提起となるものである<sup>\*21</sup>。

こうした現在の研究状況において書物を取り上げるにあたっては、史料としての書物に着目するだけでなく、①「思想性」も含めた書物の内容面への踏み込みを、諸本の異同を踏まえて行うこと、②現在の視点から国学や儒学といった学問を理解するのではなく、「往来するモノと情報のすべて」を押さえた上で、何をどう受容したのかという点を、当事者の意識に即して検討することが求められる。

また、「学問受容」を検討するにあたって、対象とする人物たちを、学者や思想家によって形作られた学問を「受け容れる」受動的な存在として理解することの不適切さは、本節で取り上げてきた諸研究が明らかにしている。本論文では、宮負定雄や彼を取り巻く人々が受容した学問の中身を、知識・情報レベルに踏み込んで検討するとともに、彼・彼女たちの学問観自体を追究する。書物以外の媒体を視野に入れ、気吹舎だけでなく地域社会における知識・情報の授受も検討することで、従来の書物・出版研究や平田国学研究とは異なる、地域指導者層と学問との関係についての見通しを示したい。

#### 四 本論文の構成

以上、第二節では中間層論、第三節では書物・出版研究と平田国学研究に言及し、本論

文の分析視角を述べてきた。本論文の主たる検討の対象は、宮負定雄という人物、平田国学という学問であるが、第一節で述べたように、筆者は人物史・学問史に止まらない、「意識面に着目した地域史研究」を志向している。そのため、本論文では、宮負定雄以外の人物を取り上げて「地域指導者層の学問受容」を考える際の論点も提起できるよう、次の三点を意識した検討を行う。

(1) 対象とする地域指導者の思想・行動を、生涯を通じて明らかにする。その際、特に、思想形成過程や葛藤の中身を掘り下げる。

(2) 対象とする地域指導者に影響を与えた、他の地域指導者や地域民衆の思想を明らかにし、それぞれの関係性を検討する。

(3) 人々が受容した知識・情報の中身に踏み込む。国学・儒学・蘭学・洋学といった学問の枠組みを自明視せず、書物以外の媒体も含んだ多様な知識・情報との接し方に留意する。

(1)(2)は、村役在任時、あるいは地域社会に貢献した活動に注目する一方で、村役に就いていない時期や村政運営と直結しない活動、地域指導者の活動への反応への注目が弱いという、村役人論・地域リーダー論の問題点を意識した課題設定である。また、(2)

(3)は、平田国学受容層と気吹舎との関係を詳細に明らかにする一方で、門人以外の人物や気吹舎以外での知識・情報の授受についての検討が弱い平田国学研究、地域社会の状況や書物以外の媒体との関係を十分に検討していない書物・出版研究の現状を意識したものである。そして、これら三点の課題への回答を、本論文は左記の各章によって導き出す。

まず、第一部では、宮負定雄の思想を検討する。

第一章では、宮負定雄および平田国学に関する先行研究をまとめ、第二章以降で取り組むべき課題を明確化する。

第二章では、宮負定雄の生涯を、彼が生きた時期の松沢村・気吹舎の状況と重ね合わせて検討する。宮負定雄は名主在任時の思想が注目されることが多く、名主退役後の関心については、論者によって評価が異なっていた。また、そもそも彼の行動自体に不明な点が多かった。そこで、本章では新出史料を多く用いて、宮負定雄の伝記的事実と生涯に渡る思想の変遷を明らかにする。

第三章では、彼の主著『民家要術』の形成過程を検討する。『民家要術』は、村役人論や近世後期の時代性を考えることができる史料として多くの研究で用いられてきたが、それらの研究は、『近世地方経済史料 第五巻』に翻刻された天保二年段階の『民家要術』のみに依拠した、不十分な史料批判に基づくものであった。そこで、本章では、『民家要術』の諸本を、同書に影響を与えた書物に着目して検討し、『民家要術』の形成・変容過程を明らかにする。

第四章では、農業論の変化を、文政年間の著述『農業要集』『草木撰種録』に加え、安政二年の自序が付された『農事窮理考』に着目して検討する。『農事窮理考』は、岸野俊彦が指摘した、定雄自身の意向による『農業要集』絶版<sup>22</sup>の背景を探ることができる重要な史料であるにもかかわらず、先行研究で内容が検討されてこなかった。そこで、本章では、『農事窮理考』の形成過程を検討し、名主退役後の定雄の思想をより詳細に明らかにする。

第五章では、江戸への出奔を経て再び松沢村に戻った後の定雄の思想を検討する。先行研究では、この時期の定雄の思想として、幽界への関心の強まりに注目が集まってきた。

そして、そうした思想的特徴は、ペリー来航を契機とした気吹舎門における主要な思想潮流の転換と逆行するものとして理解されてきた<sup>23</sup>。本章では、気吹舎門の思想潮流に関する近年の研究成果を踏まえ、定雄および地域の人々の幽界への関心の内実を明らかにする。

第二部では、第六章で宇井包教、第七章・第八章で金杉貞俊という、宮負定雄と親交があった人物の思想を検討する。

第六章では、松沢村熊野神社神主宇井包教の思想を検討する。宇井包教は、文政年間の宮負定雄が松沢村でただ一人、自身と「志を同して道に志を立る者」と評した人物である。しかし、包教は一時期、気吹舎から距離を取り、隣村長部村を拠点に活動した大原幽学の門人となっている。本章では、平田国学と大原幽学が説いた性学（性理学）という二つの学問の関係を、宇井包教に即して検討する。

第七章では、金杉貞俊の思想形成・変容過程を検討する。先行研究において貞俊は、一部の著述が紹介されているだけで、人物像がほとんど明らかにされていない。そこで、本章では、書物目録から彼の生涯に渡る関心の推移を検討するとともに、彼が知識・情報を得た書物以外の媒体についても明らかにする。

第八章では、金杉貞俊の著述を、飢饉に対する認識の変化に着目して検討する。東総地域における学問の展開を考える上で、天保飢饉は大きな画期である。本章では、天保飢饉の初発に貞俊が何を考えたのか、そして以後の飢饉や災害を承けて、その考えをどう変化させていったのかという点を明らかにする。

終章では、第一部・第二部の成果をまとめた上で、宮負定雄の人物像と東総の地域社会像に立脚して、近世日本の「地域指導者」および「学問」について考える際の方途と、今後の検討課題を示す。

※本論各章の構成は、以下の通りである。

## 第一部 宮負定雄の思想

### 第一章 気吹舎門人研究の方法—宮負定雄研究を手掛かりに—

はじめに

- 一 宮負定雄はどう取り上げられてきたか？
- 二 平田国学研究の現在

おわりに

### 第二章 宮負定雄の生涯

はじめに

- 一 松沢村と宮負家
- 二 宮負定雄の生涯—出生から名主退役まで—
- 三 宮負定雄の生涯—名主退役から死去まで—

おわりに

### 第三章 「民家」の学問—『民家要術』の形成過程—

はじめに

- 一 『民家要術』の諸本
  - 二 『民家要術』の成立—『民家要術 下巻』—
  - 三 気吹舎への持参—天保二年本—
  - 四 「民家学」の形成—天保四年本—
- おわりに

#### 第四章 「農師」への志向—『農業要集』から『農事窮理考』へ—

- はじめに
- 一 『農業要集』
  - 二 名主在任時の農業論
  - 三 『農事窮理考』の形成
- おわりに

#### 第五章 幽界への眼差し—宮負定雄と金杉貞俊—

- はじめに
- 一 気吹舎における『神界物語』
  - 二 弘化・嘉永年間の宮負定雄
  - 三 安政年間の宮負定雄
- おわりに

## 第二部 宇井包教・金杉貞俊の思想

#### 第六章 松沢村熊野神社神主宇井包教の思想

- はじめに
- 一 気吹舎への入門
  - 二 大原幽学への入門
  - 三 平田国学への復帰
- おわりに

#### 第七章 下総万力村金杉貞俊の思想形成

- はじめに
- 一 万力村と金杉家
  - 二 幼少期からの学び
  - 三 自著の執筆
  - 四 天保年間以降の学び—「医書」「軍談縁起」を中心に—
  - 五 宮負定雄との交流—「神祇古道 家相」を中心に—
- おわりに

#### 第八章 金杉貞俊の飢饉認識—「<sup>ききん</sup>餓饉書」に着目して—

- はじめに

- 一 天保飢饉以前の意識
  - 二 天保四年の意識—『餓饉憂之事』—
  - 三 天保八年の意識—『心の鏡 かまどの種』—
  - 四 最晩年の「餓饉書」—『餓饉ばなし追加』—
- おわりに

## 終章

### 一 宮負定雄という人物

本論文では、第一部で宮負定雄、第二部で宇井包教と金杉貞俊という同時期に近隣の村落で生きた人物に着目し、「近世後期における地域指導者層の学問受容」という主題について考えてきた。

まず、各章で明らかにした内容を、改めて確認しよう。

第一章では、宮負定雄と平田国学に関する研究の現状を確認した。そして、宮負定雄について、①具体的行動、②思想形成・変容の過程、③彼に対する人々の反応という三点を解明する必要があること、平田国学について、地域社会や気吹舎で展開した学問の総体を把握した上で平田国学の位置付けを考える必要があることを指摘した。

第二章では、気吹舎と松沢村の同時代的状況に留意して、宮負定雄の生涯を検討した。そして、先行研究で明らかにされてこなかった平田国学受容の段階性と二度目の名主退役以降の行動を解明し、村人たちの認識と自身の志向の間で葛藤する定雄の姿を浮かび上がらせた。

第三章では、名主在任時の定雄の思想を、『民家要術』諸本の異同に着目して検討し、『民家要術』が、松沢村での読み聞かせに用いる書物から、出版を想定した書物へと性格を変化させていることを明らかにした。そして、気吹舎での校閲を経た天保四年本では情報量が激増し、文人評判記や談義本を模した形式になっていること、『民家要術』の変化が、定雄の「身に行い安き教誡に便利なる真の道」への一貫した志向に基づくものであることを指摘した。

第四章では、『農業要集』と同書の改訂版である『農事窮理考』という、執筆時期に約三十年の開きがある二つの農書の間を、「農師」という存在に着目して検討した。二つの農書は、農書執筆の根底にある課題意識や撰種の重視という観点などが共通しているものの、『農事窮理考』には、南方の遠国の種子を植えることが「天理」や「地理」に適用という見解や、『陳勇農書』を参照した「農師」設置の提言がある。そうした異同から、定雄が『農業要集』の「誤り」と見做した点が撰種の仕方や理論の不完全さであること、定雄が当時の実例や書物、そして実体験に基づいて「農師」構想を変化させており、「農師」のあり方を自身の行動の指針にしていたことを指摘した。

第五章では、定雄の幽界への関心を、金杉貞俊との関係に着目して検討した。そして、定雄の幽界への関心の強まりが、「農師」への志向や農業研究の方向性と密接な関係にあったことを明らかにした。また、定雄以外の気吹舎門人や地域の人々の反応を取り上げ、幽界に関する話題への関心と反応の多様性を指摘した。

第六章では、松沢村の鎮守熊野神社の神主宇井包教の思想を検討した。そして、彼と松沢村や周辺村落の地域指導者層が、地域社会の状況に関する認識や「修身・齐家」に関する課題意識を共有していたこと、包教の学問観の特徴として、神職の職分に関する知識への志向が見られることを指摘した。

第七章では、万力村の百姓金杉貞俊の思想形成・変容過程を、彼が知識や情報を得た媒体に着目して検討した。そして、「地方」に関する知識を重視していた貞俊が、親族の死去を契機として医薬に関する知識への関心を強め、天保飢饉以降は飢饉に関する書物を読んで「餓饉書」執筆に活かしていったという、彼の関心の推移を明らかにした。また、貞俊の学問観の特徴として、書物からだけでなく口承による学びを重視しつつも、知識を文字化して後世に伝えていくことの重要性を認識していたこと、自家の相続と「人の為」という観点に立脚して学問を学ぶべきと捉えていたことを明らかにした。

第八章では、貞俊の著述を、天保飢饉の影響に着目して検討した。そして、被害の深刻化に伴って、食物の蓄えや飢饉の前兆を窺うことの重要性を認識するなど、飢饉認識に変化が見られること、口承によって『農諭』の内容を知るなど、飢饉に関する知識や情報を様々な媒体から得ていたことを明らかにした。

次に、本論文の成果を研究史上に位置付ける。

まず、本論文は、宮負定雄に関する多くの新事実を明らかにした。

従来、国学を受容したという事実を前提として思想が検討されてきた宮負定雄だが、彼が平田国学を学んでいったのは、平田国学を学ぶ以前から抱いていた「身に行い安き教誡に便利なる真の道」への志向によるものであった。その志向に基づいて定雄は、平田篤胤の著書『靈能真柱』の読書、篤胤による『玉嚶』などの講釈の聴講、『古史伝』の読書というように、平田国学を段階的に受容していった。

篤胤が説く幽界と現界の関係についての議論に感銘を受けた定雄は平田国学に傾倒し、気吹舎と深く関わるようになっていく。そして、自身の著述が気吹舎に集う人々に好意的に受け止められる一方、実際の村政運営に行き詰まりを感じていた名主在任時に『民家要術』を推敲していく。村人たちとの齟齬は、「農師」への志向に基づいて『農業要術』や『民家要術』の改訂に取り組んだ弘化年間以降も解消しなかったが、安政元（一八五四）年以降に深化する三沢明との親交によって自身の論への確信を深め、自説の集大成を目指していった。

先行研究は、村役人としての宮負定雄の思想を、天保二（一八三一）年の著述に依拠して論じてきたため、名主宮負定雄の姿を静態的にしか描けてこなかった。しかし、名主在任時の葛藤と試行錯誤に注目しなければ、村人たちや定雄と親交があった人々の営為は視野に入っていない。また、村役人としての定雄の位置付けは、周囲からの否定的評価を自覚しつつも「農師」への志向に基づいて活動した晩年を視野に入れてこそ可能になるはずである。

本論文の成果からは、村役人を取り上げる際には、①村役在任時の思想を不変的なものと捉えるのではなく、現実を踏まえた変化の側面に着目すべきこと、②対象とする人物の生涯を踏まえ、村役人としての当人の位置付けを行うべきことを指摘できる。

## 二 東総の「地域指導者層」

さて、本論文では、「村役人」「豪農」「地域リーダー」に対象を絞らず、地域社会に生きて人々の視座から、地域社会の成り立ちを担うべきとされた人物を考えようとした。だからこそ、神職である宇井包教と名主を務めていない金杉貞俊という二人の人物に着目し、宮負定雄の「村長」論も見直したのである。そして、彼らの思想を明らかにするだけでなく、彼らが生きて地域社会の学問をめぐる状況の解明を目指してきた。

それでは、本論文から、どのような地域社会像が浮かび上がるだろうか。

宮負定雄が気吹舎に入門し、名主に着任した文政末年の東総地域では、百姓の風俗の悪化や「浪人体のもの」の徘徊が問題になっていた。そして、定雄が名主を務めていた天保四（一八三三）年からの飢饉は、村役人たちの村政運営を一層難しくさせた。また、この頃の東総地域では、「師匠をとり文字をならわせ」る者や書物を読む人々が増え、平田国学や大原幽学が説く性学の展開も見られた。しかし、金杉貞俊が苦言を呈したように、自村のことに不案内な者や学派・流派の権威性を自明視するような者も多く、家に伝わる書物を持ってしまふような者もいた。そのような地域社会のなかで定雄は、「礼儀ハ富足に起り、盜賊は貧賤に出」という理解に基づき、農業について考え、松沢村の「村方政事改革」に取り組んだ。そして、「村方政事改革」で読み聞かせに用いた自著『民家要術』を気吹舎に持参し、出版を目指して推敲した。

名主在任時の宮負定雄は、「あるべき村役人の資質」が村役人たちの側から設定されていく十八世紀後半以降の時代性を象徴する存在として注目されてきた<sup>\*24</sup>。しかし、松沢村の「村方政事改革」が村役人層と神職の協働で行われていたこと、自著の校訂を希望する村役人層・神職と、彼らの著述に関心を寄せる領主層からの知識や情報が気吹舎に集まり、様々な人々の知識源・情報源となっていたことは、地域社会の成り立ちや「修身・齊家」についての課題意識が、村役人層以外にも抱かれていたことを示している。また、宮負定雄の「村長」論が、実在の「賈名主」<sup>\*25</sup>や寛政期の「名代官」<sup>\*26</sup>を意識していることは既に指摘されてきたが、本論文ではさらに、立野良道『役儀家言』・和泉利愛『御世の恵』など気吹舎門人あるいは後に門人となる人々の著述や、口承や書物で知った「農師」の事例を参照していることを明らかにした。金杉貞俊も自著で「村長」のあるべき姿について論じているが、彼の「村長」論は、村役人だけでなく郡奉行や代官、医者や僧侶といった存在の実例を参照して構築されている。「あるべき村役人の資質」は、村役人以外の「あるべき資質」が意識化されるなかで設定されていったのである。

筆者は、近世日本の「地域指導者層」について考える上で、地域社会の成り立ちを支えた人々を広く取り上げようとする「地域リーダー」研究の視角は有効だと考えている。本論文でも、金杉貞俊が著述に「地方に鍛念之者」と記した高木長兵衛壽明のように、史料が失われるなどの要因もあって、時間の経過とともに歴史の表舞台で取り上げられなくなった存在の姿が垣間見えたことは、地域リーダーが「各地に無数にいたであろう」という平川の見解を裏付けている<sup>\*27</sup>。

しかし、「地域リーダー」研究も含めた従来の中間層論は、村役人を務めていない人物や在地神職などの宗教者と地域運営の関わりについての検討が不十分であった。本論文の

成果からは、①村役在任者のみを検討対象とするのではなく、対象とする時期・地域に即して、地域社会の成り立ちを担った人物・担うべきとされた人物を明らかにする、②「地域指導者」たる存在に求められた資質や役割が、どのような事例を参照して考えられたのかという点を明らかにする、という村役人論・地域リーダー論の検討課題が浮かび上がる。

### 三 平田国学の捉え方

小野将が、天保初年における宮負定雄の考えが、『民家要術』天保四年本における「民家学」構想に集約されていると指摘した<sup>\*28</sup> ように、『民家要術』天保四年本の発見によって、従来の宮負定雄像は見直しを迫られている。そうした研究状況を踏まえ、本論文では、先行研究が依拠してきた天保二年本以前に作成された、宮負克己家所蔵『民家要術 下巻』も含めた検討により、「民家学」構想の形成過程を明らかにした。

定雄の「民家学」は、平田国学受容の根底にあった「身に行い安き教誡に便利なる真の道」への志向に基づき、自身の見聞や気吹舎を介して得た知識・情報を参照して見出されたもので、引用あるいは推奨されている書物の分野は多岐に渡る。しかし、定雄自身が「民家学」を「平田流の国学のずつと直段の安い処」と位置付けているように、そうした書物の内容は必ずしも平田国学と矛盾するものではなかった。また、叙述のスタイルが当時気吹舎で読まれていた『妙々奇談』や『しりうごと』を模していること、未出版の平田篤胤や気吹舎門人の著述が参照されていることは、気吹舎門人の著述の内容分析を行う際には、その著述が作成された時期における気吹舎の話題や篤胤・門人たちの関心を押さえる必要があることを示している。

国学思想史研究では長い間、気吹舎門人たちによる「国学思想」の「応用」「実践」の仕方が問われてきた。そのため、気吹舎門人個々が学んだ学問は「国学思想」の枠内でしか検討されず、篤胤の「国学」も固定的に捉えられてきた。近年、吉田麻子が提起した国学受容層を「受容主体」として捉える見解<sup>\*29</sup>は、気吹舎門人による篤胤の「思想の拡大」や、篤胤と門人たち相互の影響関係による学問の形成に着目するもので、国学研究の課題を克服する方途を示している。

しかし、気吹舎以外の出版物に対する気吹舎の関心や、気吹舎門人個々が学んだ学問の総体は、依然として明らかにされていない。筆者は現在、下総以外における平田国学の展開についても検討を進めているが、例えば、奥州相馬の気吹舎門人高玉安兄宛平田鋏胤書簡からは、篤胤没後の気吹舎において、大橋訥庵『關邪小言』や山田維則『蘭学弁』<sup>\*30</sup>が蘭学（洋学）批判の観点から推奨されていることがわかる<sup>\*31</sup>。また、筑前の気吹舎門人に対しては、門人が注文していない書物が気吹舎側の判断で送られることもあった<sup>\*32</sup>。

こうした他地域の事例と本論文の成果からは、気吹舎における話題の具体的内容と話題になった時期を、「国学」という学問の枠組みを自明のものとせず明らかにしていくこと、その上で、気吹舎における話題と「国学思想」との関係を問うていくことを、今後の平田国学研究で考えるべき課題として指摘できる。

### 四 「村長」の学問

第三章で明らかにしたように、徐々に平田篤胤の教説との親和性が高くなる『民家要術』だが、百姓は身を修め家を保つことに主眼を置いて学問を学ぶべきであること、「村長」は百姓を教諭するために書物を読んで「道」を学んだり「地方」に関する知識を学んだりすべきであることという学問のあり方に関する主張は一貫している。定雄が『民家要術』で百姓に推奨している書物には、金杉貞俊が読んだ書物や自著で推奨している書物がある。また、貞俊が、書物や口承で「地方」に関する知識を学ぶことを重視している点、文字を知っても家の治め方や子供の躰に活かさない者を批判している点など、定雄と貞俊の学問観には重なる部分が多い。しかし、貞俊が、「古人」が書いた書物を読んで発する言葉が「人の為にはいかゝあたる」かを考えることが重要であると強調している点には、定雄との学問観の違いを看取できる。

貞俊は自著で、江戸の高名な学者の門弟となり、その学者に一年に金二〇両ずつ納金して「大学者」になったという「畜名主が忤」のことを、「只金をかけて文字のミ覚へた」としても、「人の手本ニハ無益」で、「国郡村方の益にもなら」ない「娑婆ふさぎ」であると批判している<sup>\*33</sup>。この「畜名主が忤」に対する批判の観点は、宮負定雄による気吹舎への出金を否定的に捉えた松沢村の村人たちと通じる。貞俊は、「畜名主が忤」への批判に続いて、次のように述べている。

〔史料1〕

一扱名主村長となりたる人ハ、諸の行ひ今日の勤めを怠らずして、万事村人の手本と成べき人也。又村内に貧賤難渋の者あらば是を憐ミ、不埒法外親不孝の者あらば嚴敷是を制せられ、其村の為に成やうに致しなば、自然と人々のしたしみも増べし。すでに松崎村林氏の家去ル天保四年巳<sup>ヨリ</sup>して五ヶ年の穀高難渋の折柄、郷中へ救ひも差出し、其外常々の行法万事下賤の者に至迄叮嚀にして、人に金銭の用をたし、人又是を返済す。奉公人長病の時、其人代或ハ手間金も不受して、後日に少々も可被助趣等申聞候へは、当人ハ難有手を合せて<sup>ヲガ</sup>揉む程に悦ぶ、此家の奉公人に出替りと云ハまれ也。主人を始めとして家内中能く心揃ひ、柔和に身を<sup>ニウハ</sup>高ふらず、下賤の者を<sup>タカ</sup>いやしらず、誠に世に珍ら敷家なり。近き辺りの山々にはつみ重ねたる真木松葉等何レとも二三年を経て小口<sup>カタハラ</sup> 傍 白くなり、枯れさらせるたきゞ諸方に有れとも、是を取行人もなく、村中に小盗ミの者<sup>ヲダセカニ</sup>老人もなく、まことに堯舜の世の人々も斯やと思はるゝ。里中 穩 正直ものに成こそ、其本の起りハ村長大身<sup>ヲル</sup>より起る所也。其証拠ハ只今のべ申べし。後段を読んで評を入給へ。一村の先達<sup>ヲル</sup>に成ものゝ人よしなれば自然と其村人各人よしに成、是手本也。其村の村長大身<sup>ヲル</sup>悪ものなれば其村方皆悪ものに成、是悪者の手本張本也。何レ此悪邪の張本人と云ものハ、愚者の取用ひよく人をなやし付るもの也

ここに示されている、「名主村長となりたる人」は「万事村人の手本と成べき」であり、「一村の先達」たる「村長」が良ければ自然と村人も「正直」になるという貞俊の「村長」論は、定雄が『民家要術』で示した「村長」論とほぼ重なる。

先述したように、文政末年の東総地域における村役人たちの地域運営は容易ではなく、天保飢饉以降は、さらに困難さを増した。そして、百姓の風俗悪化や「浪人体もの」の徘徊など広く共有された課題だけでなく、「御小身で御病身」ながらも「御心労なる御奉公」

をする旗本領主が支配する小村松沢村、周辺の村々や村内で幾度も争論が起こった新田村万力村といった、村固有の課題への対応も求められた。

そうした困難さにも拘わらず、本論文が対象とした時期の東総地域では、「地域指導者層」に対して「一村の先達」としての資質や責務に基づく行動が、広範な人々から求められていたのである。だからこそ、彼らは課題を克服するための学問を模索したのであり、名主在任時の宮負定雄の平田国学への傾倒も、自他共に「村長」の責務と認識していた百姓の教諭のために、「身に行い安き教誡に便利なる真の道」を学んでいったことによるものと位置付けることができる。

本論文では、宮負定雄・宇井包教・金杉貞俊の学問観を追究した。そして、彼らが「村長」や百姓の学問のあり方についての意見を持ち、自身の学問観に基づいて知識や情報を得ていったことを明らかにした。こうした学問との向き合い方を、国学・儒学・蘭学・洋学といった学問の受容史として捉えては、彼らの個性が埋没してしまうだろう。地域社会における学問の展開は、何が学ぶべき学問と考えられたのか、なぜそのような学問が求められたのかという点を問うべきこと、その上で、実際に学ばれた学問の内容を明らかにすることが重要であると指摘したい。

筆者は、今後も宮負定雄・宇井包教・金杉貞俊、そして彼らが生きた東総の地域社会についての調査・研究を進めていきたいと考えている。平田国学関係史料に記された松沢村の様子、金杉貞俊の著述に記された様々な村の様子のように、まだ検討されていない、あるいは注目されてこなかった地域史料は多いはずである。本論文では僅かにしか触れられなかった大原幽学門人や、松沢村・万力村以外の村々にも視野を広げ、地域の歴史を掘り起こしていきたい。

---

\*1 「気吹舎」は、平田篤胤の号である。篤胤の娘お長の婿鍊胤・嫡孫延胤に受け継がれ、平田家三代の私塾の名称として用いられた。気吹舎への入門者は、「誓詞帳」全八冊・「門人姓名録」全六冊にまとめられており、「門人姓名録」では、第一巻にまとめられた篤胤生前の門人と、第二巻から第六巻にまとめられた没後門人が区別されている。気吹舎門に関しては、宮地正人「伊吹舎と四千の門弟たち」(『別冊太陽 知のネットワークの先覚者平田篤胤』平凡社、二〇〇四年)、『明治維新と平田国学』(国立歴史民俗博物館、二〇〇四年)が、気吹舎の門人帳に関しては、上田早織「平田門人帳に関する一考察」(『三河地域史研究』二六、二〇〇八年)が詳しい。

\*2 木村礎編『大原幽学とその周辺』(八木書店、一九八一年)は、「東総」の範囲について、「下総東部を意味し、具体的には、西は千葉県成田、東は同銚子、南は九十九里浜、北は利根川の間をさす」とし、近世の郡名で、「下総国香取郡を中心とし、印旛・埴生・武射(上総)・匝瑳・海上の諸郡にあたる」と、後述する東総地区広域市町村圏よりも広い範囲を含んでいる。

\*3 『東総地区第三次広域市町村圏計画 人と自然が調和し豊かさを実感できる“ふるさと東総”』(東総地区広域市町村圏事務組合、二〇〇一年)。

\*4 旭市新市行政推進室編『新「旭市」誕生の軌跡 合併までの旭市、海上町、飯岡町、干潟町のあゆみ』(旭市、二〇〇五年)、千葉県総務部市町村課編『千葉県市町村合併史—平成の市町

村合併の記録』(千葉県、二〇一〇年)。

\*5 被災地の状況に対する、歴史を学ぶ者の立場からの発言は多い。筆者の問題意識と関連するものとしては、泉田邦彦「茨城史料ネットのレスキュー活動」(『神奈川地域史研究』三〇、二〇一三年)がある。

\*6 ここでは、本論文の主たる対象である近世後期から幕末維新时期について言及する。筆者による中間層論の研究史整理は、拙稿「中間層」(木村茂光監修・歴史科学協議会編『戦後歴史学用語辞典』東京堂出版、二〇一二年)参照。

\*7 平川新『紛争と世論』(東京大学出版会、一九九六年)、同「転換する近世史のパラダイム」(『九州史学』一二三、一九九九年)。なお、平川の地域リーダー理解については、平川新・谷山正道編『近世地域史フォーラム3 地域社会とリーダーたち』(吉川弘文館、二〇〇六年)、平川『全集日本の歴史12 開国への道』(小学館、二〇〇八年)も参照。

\*8 小野将・志村洋・舟橋明宏・多和田雅保「近世地域社会論の現在」(『歴史学研究』七四八、二〇〇一年)、志村洋・吉田伸之編『近世の地域と中間権力』(山川出版社、二〇一一年)など。

\*9 今村直樹「近世後期藩領国の行財政システムと地域社会の「成立」」(『歴史学研究』八八五、二〇一一年)など。

\*10 久留島浩「百姓と村の変質」(『岩波講座日本通史 一五』岩波書店、二〇〇〇年)。

\*11 伊東多三郎『草莽の国学』(初版:羽田書店、一九四五年。増補版:名著出版、一九八二年)。この他、柴田一『近世豪農の学問と思想』(新生社、一九六六年)なども先駆的な成果である。

\*12 松本三之介「幕末国学の思想史的意義」(『日本思想大系 第五一卷国学運動の思想』岩波書店、一九七一年)。

\*13 芳賀登「天保期国学者の社会的機能」(同『幕末国学の展開』塙書房、一九六三年)、同「幕末変革期における国学者の運動と論理」(『日本思想大系 第五一卷国学運動の思想』岩波書店、一九七一年)、同「平田門の継承」(同『国学の人びと』評論社、一九七五年)、同「下総国学」の社会的基盤」(同『変革期における国学』三一書房、一九七五年)、同「天保期国学者の社会的機能」(同『幕末国学の研究』教育出版センター、一九八〇年)など。

\*14 岸野俊彦「草莽の国学」の再検討」(『歴史評論』三三八、一九七八年。のち岸野『幕藩制社会における国学』(校倉書房、一九九八年)に収録)。

\*15 宮城公子「幕末儒学史の視点」(『日本史研究』二三二、一九八一年。のち宮城『幕末期の思想と習俗』(ぺりかん社、二〇〇五年)に収録)、川村肇『在村知識人の儒学』(思文閣出版、一九九六年)。

\*16 田崎哲郎『在村の蘭学』(名著出版、一九八五年)、同『地方知識人の形成』(名著出版、一九九〇年)。

\*17 横田冬彦「近世民衆社会における知的読書の成立」(『江戸の思想』五、ぺりかん社、一九九六年)、同『日本の歴史16 天下泰平』(講談社、二〇〇二年)、同「近世の学芸」(『日本史講座6 近世社会論』東京大学出版会、二〇〇五年)など。

\*18 横田冬彦「書物をめぐる人びと」、同「知識と学問をになう人びと」(同編『身分的周縁と近世社会5 知識と学問をになう人びと』(吉川弘文館、二〇〇七年))。

\*19 若尾政希「近世人の思想形成と書物」(『一橋大学研究年報 社会学研究』四二、二〇〇四年)、同「書物の思想史」研究序説」(『一橋論叢』一三四一四、二〇〇五年)など。

- \*20 若尾政希「歴史と主体形成」(『書物・出版と社会変容』二、二〇〇七年)など。
- \*21 遠藤潤『平田国学と近世社会』(ペリかん社、二〇〇八年)、吉田麻子『知の共鳴 平田篤胤をめぐる書物の社会史』(ペリかん社、二〇一二年)、中川和明『平田国学の史的研究』(名著刊行会、二〇一二年)。
- \*22 岸野俊彦「伊那平田学研究序説 一・二」(『伊那』六〇〇・六〇一、一九七八年)。
- \*23 前掲註14岸野「「草莽の国学」の再検討」、同「紀州藩平田派国学者三沢明の思想的特徴」(『名古屋自由学院短期大学紀要』一〇、一九七八年)。
- \*24 前掲註10久留島浩「百姓と村の変質」。
- \*25 渡辺尚志「幕末維新期における農民と村落共同体」(『歴史評論』四七五、一九八九年。のち同『近世村落の特質と展開』(校倉書房、一九九八年)に収録)。
- \*26 小野将「草莽の国学」(『千葉県の歴史 通史編近世2』千葉県、二〇〇九年)。
- \*27 前掲註7平川新『全集日本の歴史12 開国への道』。
- \*28 前掲註26小野「草莽の国学」。
- \*29 前掲註21吉田麻子『知の共鳴』。
- \*30 『蘭学弁』は、大橋敦夫「〈翻刻〉『蘭学弁』」(『紀要』(上田女子短期大学)二九、二〇〇六年)に翻刻されているが、筆者は、國學院大學附属図書館所蔵本と内容に異同があることを確認している。今後、諸本の検討を進める必要がある。
- \*31 「相馬地方における平田鍊胤書簡I～VI」(『國學院大学日本文化研究所紀要』八九～九一、九九、一〇〇、『國學院大學研究開発推進機構紀要』一、二〇〇二～二〇〇九年)所収、安政六(一八五九)年正月五日付書簡。
- \*32 拙稿「幕末筑前における平田国学」(『七隈史学』一四、二〇一二年)。
- \*33 金杉佐久治家文書『田舎くらみの雑談 丑の巻』(天保一二(一八四一)年)。